

---

# 教皇庁・禁書目録聖省～無色の救世主～

ロク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

教皇庁・禁書目録聖省―無色の救世主―

### 【Nコード】

N3395L

### 【作者名】

ロク

### 【あらすじ】

『教皇庁・禁書目録聖省』

通称―インデックス。そこに属する教徒の一人、『美月明』はいきなりの辞令により日本へと出向くことになる。

その辞令の内容は、ある『魔女』の出現に伴う調査だった。

日本の『綾女ヶ丘』を舞台に、世界の真実が解き明かされていく……

## 主要登場人物紹介（前書き）

これは11eyesのファンフィクションです

## 主要登場人物紹介

教皇庁・禁書目録聖省〱無色の救世主〱

### ——主要登場人物紹介

みつぎあきら  
美月明・現在20歳

教皇庁・禁書目録聖省に所属する教徒。魔術の知識は豊富だが、それを使いこなす事が出来ない。基本的に優しい性格だが、時に感情的になりすぎるところがある。

くろしだかなえ  
黒羊齒鼎・現在？歳

元魔術結社トウーレの一員で、憤怒の異名を持つ大魔術師。5年前にも綾女ヶ丘人工翠玉碑事件を起こしたが、現代魔術士の二人とインデックスのウルスラにより撃退された。現在はトウーレに教皇庁と、二大勢力から命を狙われ逃亡している。

みずかみゆつこ  
水上優子・現在18歳

禁書目録聖省日本支部に所属している記録員。記録員であるが故に魔術などは使えないが、知識はそれなりにあり、日本支部では優秀なほうである。元気で活発的な性格だが、胸の小ささをネックに感じている。

もものしおり  
百野栞・現在22歳

聖省十四聖の一人。書架のウルスラの異名を持つが、本人はウルスラと呼ばれる事を嫌う。リゼットに対して何か特別な思い入れがあるらしいが……。

リリス〱デル〱サルト・現在19歳

インデックスの使徒。再誕のセシリアの異名を持ち、魔術師としては凄まじい力を持つが……。

アーベルⅡダⅡミリウス・現在34歳

インデックスで明の上司を勤めていた。炎の魔術を得意とし、業火のアントニオの異名を持つ。聖省十四聖に最も近い存在と言われているが、未だに十四聖に名を連ねてはいない。

リゼットⅡヴェルトール・現在？歳

謎の赤い結界に閉じ込められていたところを明に助けられ、それから明の家で預かる形を取っている。栞とは昔何かがあったらしいが、明は未だそれが分かっていない。

ミシエルⅡマキシミアン・現在？歳

謎の多い男。明に力の存在をほのめかす等、その目的は不明である。

## 第1章『魔女きたりて』（前書き）

この小説は11eyesのファンフィクションです。

## 第1章『魔女きたりて』

### 第1章『魔女きたりて』

#### 1・辞令

「呼び出しとして自分が遅れるって……」

上司からの突然の呼び出しに慌てて向かって来たのだが、呼び出した本人の姿が見えない。そして律儀にもこうして15分、上司を待ち続ける俺がいる。

「ん？ もう来ていたのか」

教皇庁内の中央階段を上ってくる男が言ってくる。正直、今にもキしたい。が、何とかその衝動を飲み込んだ。

「人呼び出しとして自分が遅れるって、どういう神経してんだよ？」  
普通こんな口を上司に向かって言えるはずはない。

「ほう？ お前がそんな偉そうな事言える立場か？」

ぎくりとした。実を言ってしまうえば、俺は遅刻の常習犯だったのだ。だから多分、今回も俺が遅れて来ることを見越して少し遅めに来たのだろう。

「すいませんでした」

俺は棒読みで謝ると呼び出した理由を尋ねた。

「まあ驚くかもしれないが、上から直々にお前に辞令が下った」

インデックス——今になってはその名は少し有名になり過ぎたのかもしれない。魔術師や魔法使いにその名を知らないものはいない。その実、敵対する勢力は小物から大物まで多々いる。その敵対勢力は政財界にまで及んでいると言うから驚きだ。ほんの二、三十年前には考えられようも無い状況だったらしい。最近になり、支部や拠点の増加に比例するように政界のお偉いさんがこのインデックスに

干渉するようになった。

そして事態は可笑しな方向へと転んでいった。インデックス内の活動が反政府的やら、インデックス事態がオカルト教団だとも言われ、ついには自分たちを監視役として上層部にしろなどと言って来たのだ。勿論こちらとしては断固拒否したいところだが、もしも要求を断ったとしたら、戦争になる事は目に見えていた。

インデックスにとっては国ひとつ落とすことなど大したことはないのだが、そんなことをした日には世界を敵に回すことになる。そうなれば、天下のインデックスでも手に負えなくなるのが事実だ。皮肉にも、相手の要求を呑み、こうして今も教皇庁・禁書目録聖省は無事に成り立っている。

「はあ……魔術の知識なんか微塵も無いくせに」

権力振りかざして命令してくる上層部に、俺は無性に腹が立った。でも、上からの命令は絶対だ。それにもしも俺が逆らって問題を犯したら、直々の上司に当たる『アーベル』さんにも迷惑がかかる。それだけはどうしても避けたい。

「なあ明、お前の気持ちは分かるが今は素直に聞いとこうな」

さつきはなめた口を利いてしまったけど、俺はアーベルさんを素直に尊敬していた。俺に魔術だけでなく、人としての生き方や、人との繋がり大切さを教えてくれた人だからだ。

「で、辞令の内容って何なんですか？」

「先日、日本からの報告があつたんだが、どうやら日本に魔女が現れたらしい。そこでお前に調査兼監視をして来て欲しいらしいぞ」調査とは良く言ったものだ。消されてもいいような下っ端で様子見させるつもりなのは言わずとも分かる。それにアーベルさんの苦虫を噛み潰した様な顔からも察せる。

「いいか？ 絶対に死ぬんじゃないぞ！」

アーベルさんには申し訳ないが、そんな真剣な顔で忠告されると、余計に不安になるのだが、そこはアーベルさんの優しさだと受け取

つておこう。

「分かりました」

アーベルさんに一礼して俺は教皇庁の階段をゆっくりと上がって行った。

## 2・来日

ヴァチカンとは打って変わり、日本という国は蒸し暑い。飛行機を降りた俺のこの国への最初の印象だ。とは言っても、ここは俺にとっては母国に当たる。が、5歳の時にはすでに、俺はインデックスの本部があるヴァチカンに居た。

「美月様でしょうか？」

出迎えの人だろう。見た目は七十近くのおじいさんだ。着ている服に教皇庁の印が付いている。でも、こんな年寄りを使うだなんてよっぽど人員が足りないのだろうか……？

「日本支部は人手不足なんですか？」

俺は少し皮肉るように言ったが、使いのおじいさんは笑って否定した。そこで笑う意味が分からないが、人手不足では無いようだ。まあそれはそれで問題だが……。

しばらく車に揺られていると、窓の外には住宅街の家々が流れていく。車は住宅街を抜けると、大きな建物の前で止まった。建物には『綾女ヶ丘中央図書館』と書いてあった。流石にインデックスの支部が図書館つてのはストレート過ぎないか？ 何て感想を心の中で呟きながら俺は中へと案内された。

図書館内には一般の利用客がいたりして、とてもインデックスの支部とは思えなかった。が、館の奥まで来ると地下へと繋がる階段があった。

「ささ、こちらへ……」

地獄にでも誘われているような感じで、中々恐怖を感じる。

薄暗いろうそくの明かりの中、階段を下りていくと、急に目の前に光が広がった。一瞬、その眩しさに目をつぶってしまったが、半目を開けて見て見ると、かなりの広さがある空間が目に入った。沢山の本棚が並んでいるが、それでもまだ十分に空きがあるほどに広い。

「ようこそ、我が禁書目録聖省日本支部へ」  
案内してくれたおじいさんが誇らしげに両腕を広げて見せた。

「私は、この支部長をしている村田と言う者です」

おじいさん改め、『村田』さんはどうやらここのお偉いさんだったらしい。頭の中だったとはいえ、年寄り呼ばわりした事を申し訳なく思った。

「あ、村田さん！ おかえりなさい！」

不意に、こちらに向かって女の子が満面の笑みを浮かべて走ってきた。支部長は孫と話すかのように一言二言会話を交わすと、部屋の奥に消えていった。

「あなたが本部から来た明さんですね」

いきなり先ほどの女の子が話しかけてきた。俺がうなずくと、女の子は部屋に居る他の教徒に聞こえるように大きな声で俺の事を紹介した。すると、作業を中断させて教徒の人が、次々とこっちに来た。「えっと……ヴァチカン本部から来た美月明です。」

俺が自己紹介をすると、教徒の人たちは拍手して迎えてくれた。なんだか雰囲気はいい感じなので、少しホッとした。

### 3・堕ちた魔女

しばらく教徒の人達からの質問攻めにあい、ようやく開放された。「人気者ですね！」

後ろから急に、明るく可愛らしい声が聞こえて俺は振り向いた。そこにはあの女の子が居た。

「はは……本部の人間が珍しいんだろな」

多分俺の顔は疲れていただろう。女の子は気を使ってくれたのか、支部長に言って俺を案内すると言う名目で外に連れ出してくれた。

「やつぱり、地下って息詰まりますよね」

図書館を出て、さっき俺が車で来た道をたどる様に歩き出した。ゆっくり眺めて見ると、緑が多くていい景色だ。少々蒸し暑いのが残念だが。

「君、名前は？」

俺は青々と茂った街路樹を眺めながらたずねてみた。

「私は水上、水上優子と申します！ 優子と呼んで下さいね」 好きな食べ物パスタと——」

元気良く自己紹介をしてくれた。少々無駄な情報を加えながら。

そんなこんなとしている内に、俺達は大きな階段の前に来ていた。そこからはこの町を一望でき、中々の絶景だった。遠くにはここからでもその大きさが伺える程大きなタワーが見える。

「すごく良い眺めですよね」

俺が景色に見とれていると、横から優子の声がした。

「何か、この町が好きになれそうだよ」

俺がそう呟くと、優子は嬉しそうに微笑んだ。俺の目にはその顔がとても無邪気で可愛く映った。

——鼎side

うんざりするくらいにこの町は相も変わらずに、平和で、呑気で、嫌な感じがする。別にひがみでも妬みでもないけど、イライラして来る。

「私はこんなにも大変なのにね……」

快晴の青空の下、日向に出ているのはどうしても耐えられず、私は木陰に座り込むと、痛む左腕を使わずに、右手だけで読み途中の本に目を向けた。今読んでいるこの本は大して面白くも無い内容の三流小説。それでも、今は本でも読んで少しでも気持ち落ち着けたい。

「何て惨めなの……」

無様で情け無い自分に嫌気が差す。

——そう、アレは5年前。

現代魔術師とインデックスの使徒に、私の翠玉碑計画が潰され、惨めにもトゥーレ本部に召喚された時だった。召喚された私を待っていたのは私以外のトゥーレに属している二人だった。『暴食』の『アイナス』、そして『怠惰』の『コルヴァス』その二人は召喚が終わったと同時に私に対して、容赦なく攻撃魔術の一斉射撃を仕掛けてきた。その時は流石に死を覚悟した。けど、運が良かったのか悪かったのか、私は死してはいなかった。けど、私はトゥーレの裏切り者として追われる身となってしまった。

「ホントにとんだ災難よね、計画は失敗して、組織には命を狙われる、こんな災難他に無いと思わない？」

誰に問う訳でもなく、私は呟いていた。相当きいていると自分自身でわかった。本当に惨めだ。

「あなたは……！？」

急に声が聞こえて、私は身を構えた。手にしていた三流小説を落としたのも気付かずに、私は声の主を探した。すると、そこには見覚えのある。いいえ、忘れる事など出来ない顔があった。

「ウルストラ——！！」

## 第2章『黒羊歯』（前書き）

これは11eyesのファンフィクションです。

## 第2章『黒羊歯』

### 第2章『黒羊歯』

#### 1・遭遇

——明side

のんびりと景色を眺めていたかったのだが、優子の携帯電話に連絡が入った。

「明さん、魔女の反応が！」

あまり聞きたくなかった報告だった。でも、そんな事を言っている暇は残念ながら無かった。名残惜しくも、絶景に別れを告げて俺と優子は反応のあった場所へと急いだ。

しばらく走ると、大きな公園へとたどり着いた。辺りを見渡しても、特に変わったところは無く、ホッと胸を撫で下ろしそうになったが、結界の気配を感じ取ってしまった。

「優子、悪いけど先に戻っていてくれ」

素直に聞いてくれる事を祈ったが、そんな祈りは必要なかったみたいだった。

「わかった……けど、絶対に帰ってきてください」

優子の声は震えていた。安心させようと思ったが、今回はそんな事言っている余裕は無かった。相手は魔女で、しかもインデックスの宿敵とも言える『トウーレ』の魔女だ。

魔術結社トウーレ——魔術師によって構成されている秘密結社。インデックスに唯一対抗できる力を持つ組織で、創設者の中にはあの有名な『バビロンの魔女』も名を連ねている。その多くはインデ

ツクス内でも最機密事項に当たるので、詳しく知る者は多くない。

結界の反応は確認できたが、問題はどうやって入るかだった。結界というのは元来、他の者を立ち入らせなくするために作り出す空間であるからして、入り込むのは実質不可能なのだ。

だが、今回は例外らしい。結界の外側に薄っすらと亀裂が浮かんでい、そこからなら何とか入り込むことが出来そうだからだ。

「エリアブレイク」

亀裂に手を重ね、結界侵入の魔術を発動させた。すると、俺は結界の中へと吸い込まれた。

――side

いきなりの遭遇に、流石の私もかなりの動揺を覚えた。増してや、相手は教皇庁の聖省十四聖の一人『書架のウルスラ』私にとって、最も憎むべき相手の一人なのだから。

「あら、久しぶりね……元気してた？　少し背が大きくなったんじゃないかしら」

私は動揺を隠すために軽口を叩いて見せた。けど、ウルスラには意味の無い行為だったのかもしれない。5年前もあまり口数は多くない人物だったから。

「人が人である以上、成長はするものだから」

ウルスラは以外にも、答えてきた。前に比べると人らしくなった印象を受ける。けど、そんな事はどうでも良かった。今の私にとってはこの状況をどう切り抜けるか、どうやってこの小娘を退けるかが何より重要だった。

「今頃になってどうしてここへ？」

構える私とは裏腹に、ウルスラは自然体で尋ねてきた。その余裕な姿に苛立ちを覚える。どうやら私が手負いだと気付いているみたい

だ。

「さあね、あなた達に復讐しに帰ってきたのかもよ？」

私がくすくす笑いながら挑発しても、ウルスラの態度は変わらず、感情の読めない表情でこつちを見ている。嗚呼、何てイライラするのかしら。左手が使えれば、今すぐにも殺してやりたい。

「そう、それならこつちも手加減しませんよ」

——手加減

その一言に私の理性は音を立てて途切れてしまった。

「虚ろなる鏡界」

私が唱えると、世界は一瞬で色を消し、左右逆さまの鏡の中の世界になった。

虚ろなる鏡界——鏡像の結界を造り出す私の魔術。この結果の中だけは私は世界の中心になれる。インデックスもない。『リーゼロッテ』もない。私だけが存在する私だけの世界。

ウルスラは何事も無かったかのようにただ立っている。こつちを見据えて、そんなウルスラとは対象に必死な私が何だか滑稽に思えて私の感情は昔の二つ名の『憤怒』そのものだった。

「消え去りなさい！」

右手に怒りの全てを乗せてウルスラに最大級の魔術『アジ・ダハーカ』を放った。地はえぐれ、私の放った黒い球体の魔術は轟音を立ててウルスラに襲いかかった。

「まだまだ！ 消えろ消えろおお！」

私はもう、自分でも可笑しくなっているのが分かるくらいに狂っていた。次々と私は攻撃魔術を放つ。自分の中で、限界に達しているのは良く分かってはいはいるけど、攻撃の手を休めてしまえば、私は恐らく彼女に殺される。

「はあはあ……」

時間にすればほんの数分ではあったけど、私は攻撃の手を休めることなく放ち続け、私の体力はもう限界に達していた。今にも倒れそうになりながらも、私は土煙を見据えた。

「――」

なんと言う魔術かも分からないけど、彼女は高速詠唱した。次の瞬間、土煙は一瞬で散乱し、ウルスラの姿が見えた。彼女に傷なんて無かった。あつたのは白い服に付いた汚れや、破れた後だけ。

絶望するにも値しない、絶対的な力不足。片腕が使えないだけで、こうにも差が出るなんて思いもしなかった。

「もう、やめましょう？」

私の見た最後の光景は、私を哀れんだ瞳で見つめるウルスラの目だった。

――そんな目で私を、私を見ないで……！

――明 s i d e

結界の中に入った俺の目の前には恐ろしい光景が広がっていた。地面はえぐれ、人影が二つ見え、辺りには大量の闇の力が漂っている。気分が悪くなるほどに重々しい闇の力だった。

「もう、やめましょう？」

不意に、えぐれた地面の中心地から声が聞こえた。俺はその声が魔法の物なのかどうかは分からなかったが、直感的に何故か敵の物では無いと確信した。そして、声が聞こえた直後、もう一つの人影が倒れたのが分かった。

俺は倒れた方向に向かって走り出した。倒れた方は恐らく魔法であるが、俺の足は何故かそっちに向かっていた。

「おい、しっかりしろ！……うん、息はあるな」

無我夢中で呼吸の確認をしてしまったが、相手は魔女だ。でも、見た目は普通の女の子だ。いや、俺と同じくらいの年の女性と言った方が失礼はないだろう。

「あなたは？」

立っていた方の人影が近づいて来た。俺は魔女を倒した得体の知れない脅威を魔女を抱きかかえたまま睨みつけた。

「俺は、教皇庁・禁書目録聖省の者だが」

すると、目の前に現れたのは又しても女性だった。俺の抱き抱える魔女とは大分印象が違った。魔女の方は黒い髪に、凄く大人びた雰囲気放つのに対して、こっちの子は白い髪に、凄く幼い印象を受けた。

「教徒？　そう、始めて見る顔だから分からなかった。」

始めて見る顔？　という事は、この子は少なからずインデックスと関わりのある人間だと分かった。

「君は誰で、何者なんだ？」

俺は何故か焦っていた。もしかしたら、こっちの白髪の子が魔女である可能性もまだ捨てきれないからだ。

「私は教皇庁・禁書目録聖省、聖省十四聖、二つ名を書架のウルスラ」

彼女の返答に俺は言葉を失ってしまった。インデックスの教徒なら、今の言葉を聞けば恐らく、俺と同じ反応を見せるだろう。相手はインデックス内最強を誇り、最も発言力を持つ『聖省十四聖』なのだから。

「あなたがあの、書架のウルスラ……？」

ウルスラさんは小さくうなずくと、俺の抱き抱える魔女を指差した。「その人を支部に連れて行くわ」

俺はそのまま魔女を背負うと、ウルスラさんと共に結界を出た。そしてウルスラ様の魔術で、一瞬にして支部内部へと戻った。

## 2・闇

支部へと戻った時、真つ先に半泣きの優子が迎えてくれた。俺はそんな優子の頭を撫でてやった。ゆつくりとなだめてあげたかったが、急ぎの用がありそれどころではなかった。

「すぐに呪縛の準備を！」

『呪縛』それは魔術師に対しての拘束手段の一つで、両腕を魔術を施した特殊な拘束具で縛り、魔術を使えなくする魔術だ。だが、相手は大魔術師である。これで完全に安心できる訳ではないが、しいよりかはよっぽど安全だ。

しばらくは本棚のある大広間とは別の部屋に当たる仮眠室に寝かせる事にした。

「やつぱり俺はこの国を、いや、この支部を好きになれそうだよ。多分本部だったらあの魔女をここまで運ばずにその場で抹殺していただろうね」

魔女が目を覚ますまで俺達は大広間の中央にあるソファに座って色々と談笑していた。そんな状況に、俺自身も含め、日本支部という所はどこまで緩いのか、緊張感が足りないのかと思ってしまう。近くにトウーレの魔女がいると言うのに。

「ここって、不思議なところですよね？」

すると、ウルスラさんが俺に問いかけて来てくれた。その問いは、今俺の思っていた事だった。

「私もここに初めて来たときは、同じインデックスなのかと疑ったもの。でも、今の私があるのもこの教徒の人や、この町にいる私の大切な人たちのおかげなの」

そう語るウルスラさんはとても人間らしく微笑んでいる。俺が本部で聞いたウルスラさんのイメージとはかけ離れている。そのせいか、最初に見たときもすぐにウルスラさんだと分からなかった。

「ウルスラさんにとってこの町は特別なんですね」

俺はこの町をそんな風に思えるウルスラさんの気持ちができるような気がした。俺自身この町に来たばかりだが、この短時間でこの町が凄く好きになれたから。

「そのね、ウルスラって呼ぶのは控えて欲しいんです」

俺がじんわりと和んでいると、ウルスラさんは申し訳なさそうにこちちを見てきた。

「できれば、栞って呼んで欲しいです」

あまりにも急な提案に俺は少し驚いた。思い返して見ると、優子はウルスラさんを栞と呼んでいたような気がした。だが、本部の経験から、上の者に対してそんな馴れ馴れしい態度で接するのは俺にとっては難しかった。が、ウルスラさんの何でも許してくれそうな笑顔を見ると、自然と呼べそうな気がした。

「じゃ、じゃあ……栞さん？」

ウルスラ……いや、栞さんは俺がそう呼ぶと、やさしい微笑を返してくれた。

——鼎 side

深い深い闇の中をさ迷っていた私の意識は突如目覚めた。目を開けたとき、見覚えの無い部屋で寝ていた。ちゃんとしたベットに寝ていることに不安を覚えつつ、私は更なる違和感を覚えた。両腕が動かないという。でも、すぐに呪縛なのだと分かった。だから言うてどうにかなる訳ではないけど。

「こんなのしなくても魔術は使えないわよ……」

半分いじける様に呟くと、私は再び目を閉じようとした。すると、ドアがゆっくりと開く音が聞こえた。徐々に差し込む光が増えてくる。完全には開いていないドアから見知らぬ男が入って来た。

私はとっさに目をつぶり、寝たふりをした。何されるか分からない

けど、捕まった時点で覚悟は出来ている。

「目、覚めたか？」

身構えていた分、男の優しい声に余計に気が抜けた。そのせいか私は声を出してしまった。

「ん、やっぱり起きてたか。どうだ？ ゆっくり寝れた？」

男の声はやっぱりどこか優しく、私はまたあの時みたいに心を許してしまいそうになる。そう、5年前みたいに。

「良く眠れはしたけど、寝心地は最悪ね。疲れが全く取れて無いんだけど？」

私は心を許してしまわ無いうちに、皮肉るように言った。男などに心を許したら、あの女みたく無様に身を滅ぼしてしまうから。

「当たり前だと思うけど？ あんだけ暴れば、力も底尽きるさ」  
もしかしてあの戦いを、ううん、ただの悪あがきを見られてたんだ。そう思うと惨めさが更に増してくる。こんな普通の男に私の見られたくない姿を見られたなんて、もういつその事、死んだ方がましよ、本気でそう思った。

「黒羊齒鼎、それが君の名前だろ？」

——黒羊齒

その名を聞くと怒りがこみ上げてくる。黒羊齒家は有名な魔術師一族だった。確かに、一般的に禁術とされた闇の魔術なども研究してはいたけど、それは悪用する為ではなく、今後の魔術の発展の為でもあった。それなのに、それなのに、教皇庁はそんな黒羊齒一族を危険因子と考え、壊滅させようと考えた。

相手は世界的な魔術師機関。どう考えても私達、黒羊齒に生き残る確立は万が一にも無かった。インデックスの使徒たちは圧倒的な力持って、攻め込んできた。あれが本当の地獄絵図と言うものね。

次々と、容赦なく殺されていく私の家族や友達。抵抗すらさせてもらえない一方的な虐殺。私は西洋魔術も密かに研究していたから、奴らから見つからないように、魔術を使い生き延びた。けど、今で

はあの時生き延びた事を後悔すらしてる。

——明side

「その名を二度と口にしないでくれるかしら……吐き気がするから」

俺が『黒羊齒鼎』と言う名を口にした途端、今までの人を小ばかにする様な彼女の表情が急に強張った。理由はともかく、嫌がるのならもうそう呼ぶのはよそうとは思ったが、他に何と呼べば良いのだろうか？

「黒芝かなえ。そう呼んでくれる？」

俺の心を読んだかのように、黒芝は淡々と言ってきた。『黒芝かなえ』日本からの報告書にそんな名前が書いてあった気がした。恐らくは5年前もそう名乗っていたに違いない。

「その名前、気に入ってる？」

仲良くなるうと思っではないが、何だか黒芝が悪い魔女だとは思えない。少し考え方が幼稚過ぎるが、そんな気がした。

「ええ、少なからず、あの名前よりは気に入ってるわ。」

そう語る彼女の顔はどこかさ寂しげに見えた。

### 第3章『トウーレからの刺客』（前書き）

これは11eyesのファンフィクションです

### 第3章『トウーレからの刺客』

#### 第3章「トウーレからの刺客」

##### 1・孤独

黒芝をどうするか、禁書目録聖省日本支部の方針は、驚くことに、このまま彼女を保護すると言うものだった。当の本人である黒芝は俺と少し話した後、再び眠ってしまい、こちらとしてもお手上げ状態だった。

「そう言う訳で、彼女が起きるまでやる事はないから皆、休暇と言うことでよろしくのお」

この支部長の一言で、俺達は解散になった。はずだったのだが、俺は黒芝の監視役として残るように支部長に言われた。来た初日と言うこともあり、ここを良く知る良い機会が出来た事に異論は無かった。

「ホントに良いんですか？ 栞さんまで残らなくても良かったのに」

大広間のソファに腰をかけながら、本棚で何かの本を探している栞さんに声をかけた。栞さんは何冊かの本をその小さな腕に乗せながらこつちを向いた。

「そうはいきません。彼女が魔女である以上、警戒しておくに越した事はありませんから」

そうは言っているが、栞さんの顔は穏やかに微笑んでいる。多分栞さんにとっても、黒芝が敵対するべき存在では無いと認識しているからだろう。そうでなければあの時、黒芝が力尽きた時に止めを刺していたはずだから。

栞さんは、数冊の本をソファの前に設置してあるガラス張りテ

ブルに置いて、俺の向かい側のソファに腰をかけた。

「5年前、私は彼女と戦って思った事があるんです。彼女にとって、翠玉碑を造りだすと言う計画はどうでも良かったんじゃないのか、と……彼女が真に欲したのは、自分を理解してくれる人、自分を受け入れてくれる人だったんじゃないかって……」

事件の当事者が語る言葉は、どんな報告書や資料よりも信用でき、重みがある。俺自身が感じた黒芝の印象はこう言う事だったのだ。自ら孤独を選び、自ら一人になりたがる。それなのに、他人を求めようとする。そんな矛盾をはらんだ印象だった。

「栞さんはやさしい人なんですな」

そんな黒芝の孤独な心を理解してやれる栞さんは、本当にやさしい人だと思った。

「皆が私に、やさしさを教えてくれたから……」

栞さんは目をつぶって自分の胸に手を置きながら、穏やかな表情で答えた。やつぱり、教皇庁で聞いた栞さんの印象とは全然違った。恐らくは、いろいろな事を経験したからこそ、変わったのだろう。

「お話中ごめんなさい？ 私、喉が渴いたわ」

その声が聞こえた瞬間、俺と栞さんは固まった。そしてゆっくりと声の方へ視線をやった。そこにはつまらなそうな顔をして立っている黒芝が見えた。そして何より驚くのは、両腕に施していた呪縛が外されていた。

「黒芝、魔術を封じられたお前がどうやって……」

「ふふ、案外簡単に外せるのよ」

黒芝のさつき見た挑発的な笑みとは質の違う、もっと攻撃的な微笑みに、俺は言い知れぬ恐怖を感じた。その刹那、冷や汗が俺の背中を伝ったと同時に、栞さんが動いた。が、黒芝は両手を挙げて溜息をついた。

「喉が渴いたって言ったのよ、聞こえなかったかしら？」

その顔からは、攻撃的な笑みが消えていた。それを確認して、俺はようやく安心した。

大広間のちょうど中央に位置するガラステーブルを囲んで、俺と  
栞さんと黒芝が座っている。三人に会話は無く、黒芝は俺が出した  
水をちよびちよび飲みながら辺りを見回している。栞さんは栞さん  
で、本を熱心に読んでいて、さつきから何も言わない。当然俺も俺  
で、特に何をするでもなくただ座っている。

そんな気まずい沈黙を破ったのは、やはり黒芝だった。

「暇ね……これなら寝ているのと一緒によ」

つまらなそうにそう呟くと、黒芝はまだ半分以上水の残っているコ  
ップを持って、仮眠室へと消えていった。呼び止める間も無く。

## 2・刺客

その後一晩中、黒芝が部屋から出てくる事は無かった。仮眠室の  
ドアを見ていると栞さんから言われた「彼女は理解者を求めている」  
と言う言葉が、執拗に俺の胸に突き刺さってくる。

「おはようございます！ 明さん」

「ああ、おはよう……」

優子が元気良く挨拶してきてくれても、彼女には申し訳無いのだが、  
俺の胸のつかいは取れることは無かった。

## ――優子 side

サラリーマンの出勤時間よりも遥かに早い時間に、私はマンショ  
ンを出ていた。外はまだ日が出て間もなかった。

「ううゝ7月と言っても、まだ朝は寒いね」

朝早い道に、まだ人が居なかったものでちょっと大きな独り言を言っ  
てみた。家からインデックス日本支部のある『綾女ヶ丘中央図書館』

まではそんなに距離がある訳でも無いので、毎日歩いて行っている。でも、今日はいつもより歩くペースが早いかもしれない。その訳は、自分でも子供だなあとと思う理由だけど『明さんに会えるから』だった。だから今日はいつもより髪型を頑張って作った。いつもは下ろしているけど、今日は横に束ねてみたのだ。

「可愛いつて言ってくれるかな」

明さんに対してまだ恋愛感情という物は抱いていない……訳じゃないけど、ただ素直に昨日、不安でいっぱいだった私の頭をやさしく撫でてくれた明さんが凄く素敵に見えて、だから今日も頑張った髪の毛の事とか、早起きした事とかを単純に褒めて欲しかった。

「ああ、おはよう……」

大広間に着いて一番に明さんに元気いっぱい挨拶したのに、明さんは難しそうな顔をして仮眠室の方ばかり見ている。凄くシヨックだった。でも、勝手に盛り上がっていたのは私の方だから。そう自分に言い聞かせて仮眠室とは逆方向にある研究室へ向かった。

「少しはさ、気に留めてくれても良いじゃん……」

——明side

支部長の許可を得て、再び黒芝に呪縛をかけた後、俺は帰らせてもらった。流石に精神的にも、肉体的にも限界が来ていた。支部を出る前に、なぜか俺は、黒芝の寝ている仮眠室のドアの方を一度見てから支部を出た。

教皇庁が用意してくれたマンションの一室にたどり着いた時には、俺の体力は限界を軽く超していた。遠のく意識の中、俺は備え付けのベットに倒れこんだ。

すっかり熟睡していた俺の眠りは、異様な魔力反応によって妨げ

られた。俺は寝ぼける間も無く部屋から飛び出していった。そして日本支部へと連絡する為、携帯を取り出した。

「もしもし、優子か！　今、異様な魔力の反応を感じた、そっちでも調べてくれ！」

そう告げると、俺は携帯をしまつて反応の感じる場所へと向かった。そう遠くは無いが、この魔力反応はかなり強いものだった。

辺りがすっかり暗くなった頃、反応のあった場所へ着いた。そこには黒い布に身を包んだ怪しい人影があった。人影は俺を目視すると、いきなり魔術を発動させた。あまり強力な魔術ではないが、感じからして恐らく、当たれば面倒なことになる。

クリアキュリス  
「非目視障壁」

そう考えた俺は、とつさに防御魔術である『クリア・キュリス』を展開した。このくらいの魔術なら詠唱しなくても簡単に発動させることが出来る。でも、このクリア・キュリスの効果は絶大だ。防ぐ魔術を理解していればほとんど防ぐ事の出来る、俺のお気に入りの魔術の一つ。

——バチィィッ！

クリア・キュリスに、相手の放った針のような形状の魔術がぶつかり、電線が切れたような音を立てる。やはり相手の放った魔術は、電気を形状変化させて放つ下級の魔術のようだ。だが、使う術者によつては、相手の動きを長時間止める事の出来る、恐ろしい武器に変わる厄介な魔術だ。

「——」

またしても、敵は詠唱を始めた。だが、俺は相手が魔術を発動させるまで待つお人好しではない。

ハイシフト  
「高速移動」

その名の通りの高速移動で、俺は詠唱に集中した敵の後ろへと移動した。慌てて振り向こうとする敵に、俺は身をかめ、足払いをした。そして体制を崩した敵に追い討ちをかけた。

フレイムアーデ  
「精霊炎剣」

詠唱短縮術のストックにしておいてある、俺の中でも一番の破壊力を誇る『フレイムアーデ』を発動させた。すると、何も無いはずの空間から、いきなり業炎が現れ、その姿を剣へと変えていく。その形状が完全に剣へと変わったと同時に、俺はその剣先を敵の喉の位置で固定した。

「お前は何者だ？」

「……トウーレだ」

敵はしばらく間を置いたが、答えた。トウーレの魔術師がどうしてここに？

そんな疑問を感じてはいたが、この時期に、手負いの状態で発見された黒芝。普通に考えればおのずと出てくる答えはひとつしかなかった。

——黒芝はトウーレに追われている！

そのとき、俺の一瞬の隙をついて敵が逃げ出した。発動中のフレイムアーデを消して、俺も敵の後を追った。敵の目的が分かった以上、実行させる訳にはいかなかった。

だが、敵の動きは予想よりも早く、距離をみるみる離されかけたが、走る敵は曲がり角で、女性にぶつかりそうになり、間一髪避けはしたが、体制を崩し、硬いコンクリートに叩きつけられた。それでも敵は、一瞬動きを静止させたが、また走り出そうとした。

「大丈夫か、ゆか！」

敵と当たりそうになり、よろける女性に、後ろから男が来て、その小さな体を支えた。そして男は、トウーレの魔術師を睨みながら立っていた。

「ゆかにちゃんと謝れよ！」

相手はトウーレだとは知らずに、男は言いたい放題言っている。

「私は大丈夫だから、だからね、もう行こうよ、駆くん」

ん？ さっきから気になっただけだが、この二人には見覚えがあった。栞さんの5年前の報告書の中に記載されていた人物だ。そう考えて改めて見てみると、男の方は『皐月駆』女のほうは『水奈瀬ゆ

か』であつた。

「臯月駆、水奈瀬ゆか！ 早く逃げる！」

思い出した二人の名を、俺は必死に叫んだ。すると、いきなりフルネームと呼ばれた二人は、こちらを振り向いた。その瞬間、トゥーレの魔術師は二人に対して魔術を放った。

ハイシフトを使いおうとしたが、タイミング的にアウトだった。焦る俺に、さらに追い討ちをかけるかのように、新しい反応を察知した。が、それは味方のものだったらしい。

——キイイイン！

高い金属音と共に、魔術師の放った魔術は消えていた。いや、正確に言えば斬られていたと言うべきだろう。

「二人とも、大丈夫か？」

振り切った刀を構えなおしながら、女性は二人の方を見た。その手には黒く、かなり特殊な造りをした刀『小烏丸天国』が握られている。その刀を持つと言うことは、彼女は報告書に書かれていた『草壁美鈴』だろう。

「美鈴さん？」

助けられた二人は呆然としている。恐らく、彼らは久しぶりに再会したのだろう。だが、草壁美鈴は再会を喜ぶ様子はなかった。目の前の敵を倒すことを優先させたからだだろう。

### 3・撃退

——美鈴 side

4年ぶりに再会した二人とゆっくり話したいが、そうも行かない様だ。私の目の前には得体の知れない敵がいるのだから。

「二人とも、今のうちに逃げるんだ！」

何だかこうしていると、5年前のあの戦いを思い出してしまふ。

「わかりました！」

そう言つて駆くんは、ゆかくんの手を引いて走り出した。それを合図にする様に、私は手に握る小烏丸を再度構えて、敵の方へ跳んだ。様子を見るためにも力はあまり入れずに振り下ろす。が、敵は私の振り下ろす速度に対応出来ずに、左肩から右の脇腹にかけて、浅くではあつたが、傷を受けた。

「がはっ！」

敵は悶えるように後ずさりする。どうやらただの体たらくだった様だ。私が再び刀を構えると、敵は慌てて闇に姿をくらました。

「ふう、他愛も無い」

私は吐き捨てるように呟くと、小烏丸をしまった。そのとき不意に、人の気配を感じ取った。

「誰だ！ 今の奴の仲間か？」

すると、現れたのは一人の男だった。銀の髪色から一瞬『賢久』かとも思ったが、気配がまるで違った。

「俺は教皇庁の教徒だ」

教皇庁、つまりインデックスと言うことだ。栞くんと同じ組織の間だと理解して、私は警戒を緩めた。

「君は今の奴を追つてここに来たのか？」

私の問いかけに、男は黙つてうなずいた。どうやら奴のことを知っているようだ。それに、追いかけていたと言うことは、恐らくインデックスの敵だと言うことだろう。

「もしかして、今の奴はトウーレの？」

男はまたもうなずいた。5年前、皆で戦った魔女『リーゼロッテ』もトウーレと言うところに所属していたと聞いた。そのトウーレがまたここ、綾女ヶ丘に攻め込んできたとも言うのだろうか。そんな不安を抱えつつ、私は翔くんとゆかくんを探しに走った。

私を追って来たトゥーレの反応が消えた。ご丁寧に、誰かが撃退してくれたようだった。恥ずかしながら、自分でもホッとしたのが分かった。あんな雑魚が来ても返り討ちくらい造作も無いこと。でも、今の私は完全じゃない。だからこんな所で怯えながら生きていくしかない。

「滑稽ね……」

自嘲染みた言い方をしてみた。けど、それを聞いてくれる人は居なかった……。

## 第4章『All the truth』（前書き）

これは11eyesのファンフィクションです

## 第4章『All the truth』

### 第4章『All the truth』

#### 1・悪意

――明side

『草壁美鈴』と別れた後、俺は逃げたトゥーレの魔術師を追った。さっきの戦いの中で俺は奴に『追跡者』<sup>チェイサー</sup>を仕込んでおいた。これで奴の居場所は把握する事ができる。だが心配なことが一つだけあった。恐らく奴は下っ端の魔術師でそれほど能力は高くは無いのだが、追って行った先に仲間が待ち受けていたら俺が返り討ちにされてしまう。

「チェイサーON」

魔術の発動と同時に、俺の頭の中で奴の位置とその周辺の地図がイメージされていく。俺と奴との距離はそんなに離れてはいない。こう言ったケースは迅速に終わらせなくてはならない。その理由は、もしも相手が仲間の所へと逃げてしまったらそこまでだからだ。

すると、急に奴の動きが止まった。俺は嫌な予感を抱えつつ、奴の待ち構える場所へと急いだ。

奴の止まった場所に着いた時、俺はしばらく動けずにいた。目の前で起こっている事が嘘のように思え、現実ではないと自分に言い聞かせた。だが、これは間違いなく現実で起こっている現象だった。奴の止まったところは人気の無い路地裏であったが、その路地裏の壁には大量の鮮血が飛び散り、トゥーレの魔術師だった物体は、全

身の血を抜かれて干からびている。その隣には干からびた『死体』を静かに眺めている男がいた。

「嗚呼……ア・レ・ル・ヤ」

男は静かに、だが嬉しそうに呟いた。その姿に、俺は一瞬でかなり強い嫌悪感を抱いた。

——こいつは危険だ！

俺の思考はそれしか思いつかなかった。この世の悪意を全て集めて形にしたような気を放つその男は、協会の神父のような黒い服を着ている。そして俺の方へと、ゆっくり首を向けた。目が合った瞬間、俺の体は恐怖に震えた。

「やあ君は！　そうかそうか、これはまた何たる偶然だろう。ここで君と巡り合わせてくれた神に感謝いたしますハ・レ・ル・ヤ」

奇妙なジェスチャーとともに男は神に祈りを送ったかのように両手を握って見せた。だが、神を崇拝する普通の人間では無いことは誰の目にも明らかで、俺は細心の注意を払って男を見据える。

「その魔術師を殺したのはお前か？」

恐怖を振り切るように言い放った。男は大きく両腕を開いて笑った。それは恐らく肯定と言う意味だ。そして俺の恐怖はますます大きく、確かなものに変わっていった。

「怖がらなくても良いのですよ。美月の子孫よ……私はお前にある事を教えに来たのだから」

恐怖と訳の分からないこの男の言動に、俺の思考は完全にショートしていた。それでも男の言った『美月の子孫』と言う言葉が引っかかった。

「俺の事を知っている？」

男は笑顔でうなずく、そして俺の心臓の鼓動は早くなる。いつそ一思いに殺して欲しいと思ってしまっほに、俺は恐怖を感じた。

「All The Truth——それが君の力の名だ……覚えて

おきたまえ」

思考が追いつかないうちに、男は消えていた。『オール・ザ・トゥールース』その言葉だけを残して。

——リゼットside

「暗い、怖い、寒い、誰か——」

気がついた時、そこは見たことも無い建物が幾つも建っている恐ろしい赤の世界だった。またあの黒い化け物達に閉じ込められるんじゃないかと、私は怯えながら物陰に隠れていた。誰かが助けに来てくれることを願いながら、泣きながら。

——泣いているの誰？

不意に、優しい声が聞こえた。急いで顔を上げるけど、そこには誰もいない。そして少し周りを見渡して、私はまた顔を伏せる。

「誰か……助けてください」

私の声を誰も聞いてくれていなくても、私は言い続けた。疲れて眠くなるまで、何度も何度も。あそこに閉じ込められていた時のように。

——明side

日本支部に戻り、支部長の『村田さん』にこの事件のことを報告した。何があつたのか報告しているうちに、俺は頭であの男のことをまた思い返していた。あの男の言った言葉は、どれも俺を困惑させていた。

「明さん、お疲れ様でした」

支部長室を出た俺に、優子が寄ってきた。朝の事もあり、俺は気乗りしないながらも優子の話に付き合う事にした。

優子と色々と話をしたところで、俺は黒芝のいる仮眠室へ向かった。

「起きてるか、黒芝？」

部屋が一番奥に設置してあるベットで、座りながら目をつぶっている黒芝に俺は尋ねた。黒芝は起きていたようで、すぐに目を開けて俺を見上げるような形で顔を上げた。その瞳は赤く透き通っている。今にも吸い込まれてしまいそうになるほどに。

「All The Truthってのを知っているか？」

俺の問いかけに、黒芝は含みのある笑みを浮かべた。その反応は何かを知っているようで、俺は少し期待して黒芝の次の言葉を待った。知ってはいるけど、あなたに答える義理は無くってよ？」

当然の回答だった。でも、今の俺はこんなことで引き下がってはられない。少しでもあの男が残した言葉の意味を理解したい一心に。

「頼む、教えてくれ！俺が今頼れるのは君しかいないんだ！」

自分でも驚くほどに焦っている自分がいた。そんな俺を黒芝は面白そうに眺めているのが見えた。それでも俺は頭を下げていた。

「そんなにまで知りたいなら教えてあげましょうか？その代わりに私をここから出してくれるのが条件だけど」

悪戯っぽく笑う黒芝。当然そんな要求を飲む訳にはいかない。俺は深く目をつむり、悔しさともどかしさをかみ締めた。

「くっ……この魔女め——」

言ってから後悔した。黒芝の顔に、さっきまでの笑みは消えていた。

## 2・少女

取り返しのつかない事をしてしまったと気付いた瞬間、それは人

間が最も愚かな瞬間であると俺の祖父は言っていた。その言葉は今までに俺にぴったり合っている。

「ごめん、ついカツとなつて——」

言い逃れようとした俺を、黒芝は手で制した。そして何も言わずに横を向いた。何も言わないが、それは明らかに拒絶だった。

逃げるように仮眠室を出た俺は、そのまま誰とも会話せずに支部を出た。このままマンションに帰る気にもなれず、しばらく夜風に当たることにした。

人気の無い道をただポツポツ歩く。昼間の暑さはどこに行つたのか、暗い夜道は少しだけ肌寒かった。

翌日、日本に来てから始めての日曜日がやってきた。日曜といつても、特にやることも無い俺はまた散歩に出かけた。早くこの町にも慣れたいというのもあるが、なによりも家にこもつてには勿体無いほどに空は青く、曇っている俺の心を晴らすためにも、外に出てみようと思つたからだ。

坂の上からこの町を見下ろして見ると、その綺麗さに再び驚かされる。こんな絶景は本部のあるヴァチカンでは絶対に見る事が出来ないだろう。

——誰か、助けて……

不意に女の子の声が聞こえた。あまりにも突然すぎることに戸惑いながらも、俺は辺りを見回した。が、声の主は見当たらない。空耳だとも思えたが、声が聞こえた瞬間に、大きな結界の反応を同時に感知した。一瞬黒芝のことを考えたが、明らかに結界の魔力が違いすぎる。とにかく俺は結界の魔力を感知した場所へと急いだ。

結界の反応を感じた場所は以外に遠く、時間がかかったのだが、まだ反応は残っている。『チェイサー』で正確な位置を特定した。

その場所は『新綾女ヶ丘駅』の前に位置する広場であった。

エリアレイク  
「結界侵食」

駅前に着いた俺は、早速結界に侵入を試みた。前回のように亀裂が無い結界の侵入は、この魔術をもつても成功するか分からない。が、魔術を発動してから数秒で一人入れるほどの小さな穴が開いた。その穴から見える結界の内部は全てのものが赤く染まっていた。

「……誰？」

俺がこの異様な雰囲気にも飲まれていると、結界の内部からさっき聞いた声が聞こえた。俺は穴をくぐり、声の主を探した。すると建物の物陰から、白い洋服を着た女の子が目をごすりながら出てきた。

「君が助けを呼んでいたのか？」

女の子はずっとこんな場所で泣いていたのだろう。両目は赤く腫れてい、瞳も充血している。その姿は見ているのも辛いほどに痛々しかった。

「あなたは、私を助けに来てくれたの？」

消えてしまいそうな程小さい声の問いかけに俺はすっかりとうなずいた。すると、女の子は表情はパアツと明るくなった。そして安心して力が抜けたのか、地べたに座り込んでしまった。俺は座り込む女の子に近づき、手を差し伸べた。

「ありがとうございます、何だか安心してしまっ……」

笑顔で俺の手を握ってきた手は凄く小さかった。

女の子が落ち着いたのを確認して俺は色々と聞いてみた。この結果のこと、どうしてここにいるのかを。だが帰ってきた言葉は「分からない」だった。恐らく彼女はこの結果に閉じ込められていただけだったのかもしれない。

——リゼット

それが彼女の名前だった。その名を聞いたとき、一つの名前が浮

かんできた。その名は『リーゼロッテ・ヴェルクマイスター』トウ  
ーレの創始者の一人で、『バビロンの魔女』とも呼ばれている人物  
だが、この子からはそんな悪意も感じなければ、魔力も感じられな  
い。が、完全に無関係では無いと思う。

「じゃあ、取り合えずここ出ようか」

リゼットは小さくうなずて、俺の手を握ってきた。思いがけないそ  
の行動に少し驚いたが、今はこのままできてあげることにした。

## 第5章『リゼットとリーゼロット』（前書き）

これは11eyesのファンフィクションです

## 第5章『リゼットとリーゼロッテ』

### 第5章『リゼットとリーゼロッテ』

#### 1・来客

結界から抜けてすぐに、俺はリゼットに上着を着せてあげた。リゼットの着ている服ではあまりにも目立ちすぎるためだ。

「眩しいですね、とっても……」

リゼットは、今にも泣き出しそうな震えた声で外に出れた喜びを口にしていた。握っている俺の手を更に強く握ってきた彼女の頭を、俺はそつと撫でてあげた。

取り合えずリゼットは俺の家で保護してあげる形を取ることにした。支部には黒芝もいるので、リゼットを置いておく訳にもいかなからだ。

「これからどうするか決まるまではさ、俺の家に居ていいからね」

新綾女の町並みを歩きながら、俺とリゼットは色々な話をした。彼女の身の上や、俺の事とか色々。すると、横から腹の鳴る音がした。

「あ……ごめんなさい」

リゼットが顔を赤くしながら恥ずかしそうにうつむいた。その姿があまりにも可愛くて、俺はつい笑ってしまった。俺の笑った声を聞いたのか、リゼットの顔はますます赤くなる。

「明さんは意地悪です……」

少しばかり調子に乗りすぎたようだと反省しつつ、携帯を取り出してある人物に連絡をとった。

「保護した女の子って……この子ですか？」

呼び出した人物とは『優子』だ。まあリゼットを見た彼女のこの反応は当然と言えば当然だろう。今の時代にこんな服を着ているのはかなり珍しいと思う。

「名前はリゼット。しばらくは俺が面倒を見てあげることにしたから」

優子はじろじろとリゼットを見ている。と思ったらいきなりリゼットに抱きついて頬ずりし始めた。

「もう、リゼットちゃん凄く可愛いですよ」

どう対処すべきか困惑気味のリゼットは、俺に助けを求めている。正直俺も困っている。最初の印象から元気な子だとは思ってはいたが、優子がこんな可愛いものに目が無いキャラだったとは思ってもしなかった。

「リゼットが困ってるからその辺にしといてくれ」

優子はようやく我に帰ったのか、リゼットを開放してくれた。

「ごめんね、リゼットちゃん。つい、癖で……」

そう言っただけはと笑う。どんな癖をしているんだろうというツツコミは置いて、優子を呼び出したのにはちゃんとした理由があった。

「リゼットさ、お腹空いてるみたいなんだよ。どっか良い店知らないか？」

——リゼットside

明さんのお知り合いの優子さんに連れられて向かった先は『ツィベリアダ』と言うおしゃれなお店だった。

「おや？ 優子ちゃんじゃないか！ 最近来てくれなかったから、おじさん寂しかったんだよ」

お店のご主人と優子さんはお知り合いらしく、仲良さそうにお話をしている。ご主人の方はとっても気さくで、良い人なのだとすぐに

分る。

「優子ちゃん今日は凄く可愛い子を連れてきてくれたんだね」

お主人は私を見つけると、やさしく微笑んでくださった。そのとき、凄く心が温かくなったのが分かった。久しぶりに出会えた人たちが、こんなにも良い人達ばかりで良かった。心からそう思えた。

席に案内してもらい、しばらく待つと注文していた『オムライス』が来た。黄色くてふわふわした卵がとっても美味しそうで、またお腹が鳴ってしまった。

「ふふ、どうぞ」

オムライスの乗ったお皿を運んでくれた優しいそうな女の人が、私のお腹の音を聞いて微笑みながらスプーンを渡してくれた。

「ありがとうございます。では、いただきます！」

女の人が私が食べるのを見ながらまた微笑んでくれた。オムライスもその微笑と同じくらいに優しい味がして、すごく胸が温かくなれて、思わず涙が出てきてしまった。

お店の人達に挨拶して私と明さんはお店を出た。優子さんはお店にもう少し居ると言っていた。

「お腹はもう大丈夫か？」

歩いていると明さんが気を遣って聞いてきてくれた。その問いかけに、私はうなずいた。自分でも不思議なくらい自然に出た笑顔に驚いていた。こんなに自然に笑えたのはいつ以来なんだろう？ あの赤い世界に居たときはずっと一人で怯えながら過ごしていたから笑顔になてなれなかった。

「明さん、本当にありがとうございます……」

私は小さくそう呟いて明さんの手を握った。

新しい任務が私に言い渡された。その内容は『日本支部にいると思われる魔女の、速やかな抹殺』だった。この手の任務はもう慣れていた。

「では、頼んだぞ……セシリア」

セシリア——それがここでの私の名前。教皇庁・禁書目録聖省では使徒となった者には、自らの名のほかに異名と呼ばれる新たな名を神から授かる事が出来る。そして私には二つ名の『再誕』があり、それは私が得意とする魔術の特徴を取ったもので、他の使徒の人間も同様に得意な魔術を象徴する二つ名が与えられる。

この名を貰ったのは、私がまだ15の時だった。その当時の私はこの名の重さを理解してなかった。

## 2・対決

——明side

もうすぐ日付が変わるといふ頃、俺はようやく一息つく事が出来た。そして何気なくベッドの方を見る。そこにはぐっすりと眠るリゼットがある。

「ううん……もう食べられませんかよ」

幸せそうな夢を見ているようで安心した。それにしても、改めて考えてみるとリゼットは一人ぼっちであの結界の中にいたのだ。俺には想像も出来ない孤独や不安と戦っていたんだと思うと、どうにもやるせない気持ちたちが沸いて来た。

次の日、俺はいつもより少し早めに起きていた。今日は黒芝の見張り兼話し相手にならなくてはならない日だったからだ。

「お出かけですか？」

支度をしていると後ろから声がした。どうやらリゼットが起きたみたいだ。

「ちよつと仕事でね。朝ごはんはテーブルに出てるから好きに食べてて」

とは言ったが、トーストに目玉焼きというオーソドックスなメニューで少し恥ずかしい。でも、時間が無いのだから我慢してもらえないが。

ほぼ身支度が済み、俺もテーブルに着いてトーストを口にした。正面に座るリゼットの顔をチラッと見ると、美味しそうに食べているのが見えて、すこし安心した。

「明さんがお仕事に行ってる間、私はお留守番ですか？」

リゼットの顔から笑顔が消えていた。俺はそのことに気付いた時ハッとした。急いでて考えが回らなかったが、リゼットをまた一人にさせてしまうところだった。かと言っても、支部に連れて行くのもどうかと思った。でも、寂しそうに俺を見るその瞳に、俺は負けた。「リゼットも、一緒に行こうか」

リゼットはその言葉を待っていたかの様にパアッと笑顔になった。もしかして、リゼットは計算高い人間なんだろうか……。ちよつと苦笑してしまった。

連れて行くのは良いとして、リゼットの着る洋服に困った。流石にあの派手な格好は流石にどうかと思った。

俺は駄目元で『栞さん』に聞いてみた。すると、以前着ていた小さいサイズの服があるという事で、持ってきてくれることになった。

数十分後、栞さんが来てくれた。完全に支部へは遅刻になってしまったが。

「それで、この洋服は明君が着るの？」

栞さんは悪戯っぽく言ってきた。それに対し、俺はすかさずツッコミを入れ、リゼットを紹介した。が、事態は思いも寄らない方向へと行ってしまった。

―― 栞 s i d e

明君に連れられて出てきた女の子と目が合ったとき、私は驚きのあまり言葉を失った。

「どうして……？　なんであなたがここに?!」

私の目の前にいるのは、あの『赤い夜』の水晶の中に閉じ込められていた『リゼット』だった。彼女の正体は『リーゼロッテ・ヴェルクマイスター』という魔女で、私達が倒したはずの人物だった。それがどうしてここにいいのか、私は極度に混乱していた。

「栞さん？」

明君が困っているのが分かった。けど、この動揺は隠しきれない。

「私を、ご存知なんですか？」

リーゼロッテが近づいてきた。私の頭はショート寸前になっていた。そして、気がついた時、私は魔術を発動していた。私の周りには無数の魔方阵が展開している。

トリックフレイク  
「魔術分解」

明君が見慣れない魔術を発動すると、私の周りに展開していた魔方阵が一瞬で消え去った。

「落ちて着いてください栞さん!」

明君の怒号が耳を突いたとき、私の意識ははつきりとした感覚を取り戻した。そして最初に視界に入っただのは、怯えながらこちらを見るリーゼロッテの姿だった。

―― 明 s i d e

栞さんの突然の魔術発動には驚いたが、何事も無く済みホッとした。そして腰を抜かして地べたに座り込むリゼットを起こしてあげ

た。すると、やっぱり凄く怖かったのだろうか、俺にすぎるように抱きついてきた。

「ごめん、なさい……」

栞さんは力なく呟いて、うつむいた。世間の目というものもあるので、一度俺の部屋に戻って話す事にした。

詳しく話を聞かしてもらうと、さっきの行動が理解できた。けど、彼女は『リゼット』であり『リーゼロッテ』では無い。そのことを理解してもらえるように、何度も弁解した。

「そうね、多分さっきの様子からしてもそうみたいだし」

ようやく納得してくれたようで、俺は一息ついた。リゼットの方も落ち着いたみたいで、俺の出した水をちびちび飲んでいる。

「栞さん、これはあくまで仮説ですけど多分、リゼットの中のリーゼロッテとしての人格は、皐月駆が虚無の魔石ごと破壊したとしてリゼットという人格だけが生き残ったと考えられるのでは無いでしょうか？」

少し現実的な考えでは無いが『エメラルド・タブレット』の力は人知のそれを遥かに逸脱しているので、この仮説はありえなくも無いと考えている。それは栞さんも同じようで、取りあえずは、この仮説で落ち着く事にした。

「そう言えば、本題の洋服のほうは……？」

すっかり忘れていたが、栞さんはそのために来てくれたんだ。危うく忘れるところであった。

「そうね……じゃあ、リゼットちゃんはこっち来て」

そう言うと、リゼットと栞さんは寝室の方へ消えていった。俺は着替えが終わるまで待つ事になっが、この時間を利用して少し頭を整理する事にした。

赤い夜——今から5年前に確認された大規模な結界。その正体はトウーレの首領である『リーゼロッテ・ヴェルクマイスター』とい

ンデックスが送った『討伐隊』との戦いが産んだ封鎖空間であった。この空間の中では、自らの肉体すらも闇の精霊に売る事で、リーゼロッテと戦い続ける討伐隊がいた。

討伐隊——インデックス禁書目録聖省が宿敵であるトゥーレの首領リーゼロッテを排除するために送った精鋭部隊だ。そのメンバーは『聖省十四

聖』と言われる最高位の魔術師達である。だが、リーゼロッテとの戦いは熾烈を極め、討伐隊は全滅した。だが、禁書目録聖省には消息を絶ったという事になっており、彼らは反逆の徒として語られている。

リーゼロッテ——別の名を『バビロンの魔女』『炎の魔女』など様々な異名を伝えられている。トゥーレの創始者の一人でトゥーレの首領である。彼女の中には翠玉碑の欠片である虚無の魔石が存在しており、その力で数百年生き続けていると云われ、不死身の体を所有していると思われる。だが、5年前『アイオン却の眼』を所有する『皐月駆』によって倒されたという事だ。

「あの、お待たせしました……」

つい、考え込んでしまった為そんなに待った感じがしないが、かなり時間が経ってしまったようだ。微笑みながら立つ栞さんの後ろでもじもじとするリーゼットが顔を覗かせる。

「凄く似合ってますよ、サイズもぴったりだったしね」

さっきまでの栞さんとは打って変わって明るい顔をしている。そしてリーゼットが栞さんに促されて、その姿があらわになった。今まで着ていた白いゴスロリの服も似合っていたけど、今着ている洋服も凄く似合っていた。

「凄く可愛いし、似合ってるよ！」

俺は思わず言葉にしていた。それを聞いたりゼットは恥ずかしそうだが、嬉しそうに笑った。

## 第5章『リゼットとリーゼロッテ』（後書き）

感想、意見、注意など気軽にお願いします。

## 第6章『元賢者の横暴』（前書き）

これは11eyesのファンフィクションです。

## 第6章『元賢者の横暴』

### 第6章『元賢者の横暴』

#### 1・変貌

俺はリゼットと栞さんと共に支部へと向かった。その道中リゼットはやたらとご機嫌で、俺の顔を見る度にニコニコ笑っている。よっぽど栞さんから貰った洋服が気に入ったんだろうな。

「良かったなあリゼット。可愛い洋服着れて」

そう言つて俺は栞さんの方を見て、軽くお辞儀した。

「はい！ 栞さん、本当にありがとうございます」

リゼットの純粋な笑顔に、栞さんも自然と微笑んでいる。俺はふとリゼットの笑顔は周りの人間も笑顔にする事が出来る力があるのだなと思った。

支部に着いた時、俺は何か奇妙な違和感を覚えた。いつもと同じ様で、いつもとは全く違う雰囲気の支部。その違和感の正体は『結界』だった。

「栞さん！」

俺が叫ぶより先に栞さんは行動していた。リゼットを非難させてくれたようだ。俺はすぐさま支部を覆う結界に手をかざした。かざしてみても分かったが、この結界の性質は『あの男』のものだった……。

——side

目が覚めた時私は妙な感覚に陥っていた。妙な悪寒と心臓を掴ま

れているかのような緊張感、そして言い知れぬ恐怖心。

「やつとお目覚めかな？」

聞き覚えの無い男の声が聞こえ、私は慌てて身を起こした。そこに立っていたのは黒い服をまとった奇妙な男だった。男は下卑た笑みを浮かべながら私を見ている。

「何か用かしら？ 女性の寝顔を盗み見るのは良い趣味とは言えないわね」

隙を見せないようにと、私は男に挑発的な態度をとって男の出方を伺った。でも、男は私の警戒心とは裏腹に小さく笑って見せた。その姿が妙に怪しく、そして恐怖を感じる。

「まあ落ち着きたまえ黒羊齒鼎。私はあなたを助けに来たのですよ？」

男は大げさなジェスチャーと共に言ってきた。正直信用しても良いような相手ではないのは良く分かる。けど、その真意が何なのか知りたかった。

「助ける？ 良く理解せざる言葉ね……」

男はまたも下卑た笑い方をしてこう続けた。

「インデックス、トゥーレ…… 敵に回すには大きすぎる勢力である二つですよ？」

確かに今の私の状況はそうだ。トゥーレからは反逆者扱い、そしてインデックスからは捕虜として扱われている。実質これは死んだも同然。

「悔しいけれどあなたの言う通りね…… これは最悪の状況よね。それで、あなたは私の味方？ それとも敵として考えた方が良いの？」  
「何を言うのですか！ 私はあなたの味方ですとも…… 助けてあげましょうと先程も言いましたか？」

そんなのは分かった。でもこの状況で私に味方をすると言うのはどう考えても可笑しい。信じられるはずが無いのが自然と言うもの。  
「私の願いは一つ、退屈をしのげればそれで良いのですから……」  
更に怪しい雰囲気は増してきた。こんなにも分かりやすい恐怖を感じ

じたのはいつ振りだろうか。私は以前にもこんな感じを感じた事があった。

「あなた、何者？」

「私はミシエル」マキシミアン。この世が焼け落ちるのを見届ける者……」

——明side

結界の中の光景はあまりにも悲惨すぎた。支部があつたはずの地下室には教徒達の死体が散乱していた。ついこの間までは普通に話していた人たちが、今は冷たくなっている。

「うう……誰か助け、て」

女性の力無き声が聞こえた時、本棚の影に人が倒れているのが見えた。確認はしていないが、恐らく人影の正体は『優子』なのだと悟った。

「優子！　しっかりしろ！」

抱きかかえた彼女の体は血にまみれていた。だがそれは彼女自身の血ではなく、他人の血である事が分かり、不謹慎ながら少し安心した。身体的なダメージは少ないとは思うが、精神的なダメージは甚大だろう。

「明さん……皆、皆殺されて——！」

「もういい、何も言わないでいいから……！」

そう叫び、優子の震える体を強く抱きしめた。恐怖にまみれた優子の顔は見たくなくて……。

仮眠室にいる黒芝が気になり、優子を座らせてから仮眠室へ向かった。仮眠室に近付くにつれ、俺の背中に冷たい汗が伝うのが分かる。

「黒芝！」

仮眠室のドアを開け、最初に目に入ってきたのは変わり果てた黒芝の姿だった。黒いドレスをまとい、その身に宿る魔力も完全に回復していた。

「あら、誰かと思えば……どう？ 素敵なドレスじゃない？」

相変わらずの挑発的な態度。だが、今までとは訳が違う。完全に目上からの挑発、そして圧倒的優位に立つ者の目。これまでの彼女とは思えないくらいに変わり果てている。外見も内面も。

「黒芝、一体何があつたんだよ！」

俺の問いかけに対して、彼女は不機嫌そうな態度をとった。

「黒芝？ 私の名前は黒羊齒鼎。誰かと間違えてるのかしら？」

根本的に何かが違う。もう、俺の知っている彼女ではない、それだけは分かる。

「目障りよ、どいてくださる？」

下卑た笑みを浮かべると、彼女は俺に右の手のひらを向けてきた。とっさに彼女の魔力が右手に集まるのが分かった。

——来る！

そう悟った途端、俺の視界は黒い光に覆われ、そこで俺の意識は途絶えた……。

## 2・再会

次に目が覚めたのは自分の部屋のベッドだった。体中に痛み、と言うよりは体中が火傷を負った様な感覚が襲った。激痛ではないが、それなりに辛い。ようやくの思いで体を起こすと、リビングのソファで眠っているのリゼットが見えた。その可愛い寝顔に、俺はほんの少しだけ癒された。

――！

不意に、俺の頭の中で支部での光景がフラッシュバックされた。すると、俺の心は突如光を失い始めた。重くなる頭、霞む視界、荒くなる呼吸、とてつもなく深い闇が俺の中に立ち込めていく。

「はあはあ……く、くろ、しだ……」

最後に見た『黒羊齒鼎』の姿を思い出された時、俺の意識は再びぶつとりと途切れた。人が感じられる感情に限界があるとしたら、俺は今その限界を迎えたのだらう……。

「――さん！――きらさん！ 明さん！」

次第に、はつきりと呼ばれる自分の名前に気付いて目が覚めた。

目の前には心配そうに目を潤ませるリゼットがいた。どうやら俺は気絶した時、ベッドから落ちてしまっていたらしい。

「ごめんごめん、寝増悪かったね」

俺がおどけて見せると、リゼットは安心したようだ。

「もう、心配しましたよ」

膨れるリゼットの頭を撫でてやり、俺は立ち上がった。体の痛みは大丈夫だが、心の痛みは尋常では無かった。

「あ、目が覚めたのね」

寝室からリビングに出ると『栞さん』がいた。キョトンとする俺に、栞さんは冷たい水を差し出してくれた。差し出された水を一気に飲み干すと、俺の思考はようやく活動し始めた。

「そっか、栞さんにリゼットを任せてたんだった……」

栞さんにその事でお礼を言つと、俺はある情報が欲しくてテレビを点けた。

「本日、綾女ヶ丘図書館が、何者かによって襲撃されました。死傷者、怪我人は二桁に達したと言う事です。」

テレビに映される図書館は見るも無残な程に、焼け焦げていた。犯人は恐らく黒羊齒以外の何者でも無い。これはあの女を本部に連行しなかった俺の甘さが引き起こした結果だ。俺は二人に悟られぬよう、握ったこぶしに力を入れた。

——リリス side

日本支部であつた所へ着くと、そこには大勢の人ばかりが押し寄せていた。まるで餌に群がるアリの様で、気持ちが悪くなる。魔力の反応からこの近くに『アイツ』がいるのは確かだ。  
「とりあえずは接触しておこうかな……」

魔力の痕跡から見ても、この建物に違いない。私はエレベーターに乗り込み、最上階のボタンを押し、アイツの元へ向かった。部屋の前に『美月』と言う表札があることを確認し、私は魔術を発動させた。

——ガアアアン！

鉄製の扉を打ち壊すと、私は部屋へと侵入した。

「動くな！」

ドアを壊した衝撃で舞った煙の中から、私の良く知る声が聞こえた。  
「明、私だよ」

すると、明が発していた殺気は消え去り、明の間の抜けた声が聞こえた。と同時に、部屋の奥から女の子の声も聞こえた。

「支部が破壊されたと言うのに、お前は女遊びか……」

私が呆れ声で呟くと、煙の中から明の顔が出てきた。

「リリス……頼むから常識をわきまえてくれ！」

声の調子から怒っているのは分かるが、たかがドアを壊した程度で

怒るとは、相変わらずの単細胞だ。

美月明——私が教皇庁で気を許す事の出来る数少ない人間の一人。魔術の知識は豊富だが、それを使いこなす技量は無い『ただのガリ勉』けど、明は私に対してもとても優しく接してくれる。だから私も気を許せる。

「明さん、一体何が……？」

部屋の奥から聞こえた声の主が現れた。見ると、身長は私より少し小さい。私自身身長は小さいほうだけど。

「リゼット、大丈夫だよ。彼女は俺の仲間だから」

そういつて笑いかける明。何か、凄く仲が良い。それに、明がこんな無防備な笑顔を見せるなんて……まさか、明はあの有名な『ロリコン』と言う奴なのだろうか。

——明side

家のドアを豪快に破壊して入ってきたのは『リリス』だった。思わぬ再会に、戸惑いと怒りがこみ上げてくる。怒りの理由は『ドア』の件で、そして教皇庁時代にも度々あるリリスの狂乱に対してだ。

「リリス、取り合えずドアを直してくれ……」

右手でこめかみを押さえながら、俺はリリスに言った。こう言うのは彼女の得意分野だからだ。

「客人に直させるなんて——」

「誰のせいだよ！」

俺のキビし目なツツコミに、リリスは黙って得意魔術の『Re：Birth』を発動させた。黄金と白色の混ざり合ったボールがドアのあった場所を包むと、柔らかな光と共にドアが元通りに直った。

「お疲れリリス、相変わらず綺麗な術だよな」

「疲れた……」  
機嫌が悪くなってしまったようだ。自業自得だと思うのは俺だけだろうか……。

## 第6章『元賢者の横暴』（後書き）

近いうちに人物紹介を追加したいと思います。

あと、よければ良いので好きなキャラクターをコメントしていただければ小説のこれからの展開の参考にしたいと思います。

## 第7章『変わる日常』

### 第7章『変わる日常』

#### 1・喪失

支部の一件で動揺していた俺にとって、このタイミングでのリリスの訪問は有り難いことでもあった。

「それで、どうしてリリスが日本に来たんだ？」

リリスは俺が煎れた紅茶を酷くまずそうな顔をしてすする。紅茶はパックの物で、決して美味しくはないだろうが、そこまでまずい物でも無いだろうに……。

「魔女、黒羊齒鼎の事で来たに決まってるでしょう？」

リリスは、まずそうに飲んでいた紅茶をテーブルに置き直して言った。その返答は、容易に想像する事が出来たが、実際には聞きたくの無かった言葉だった。

「やっぱり、だよな……」

「何か不都合な事でもあるの？」

人の気も知れず、淡々とした物言いのリリスに対して、少し苛立ちが募り始めた。だが、リリスに今回の事を話す訳にもいかなない為、俺は行き場の無い苛立ちを飲み込んだ。

「黒羊齒鼎の消息は不明だ。何せトウーレに追われてるんだからな

……」

明らかな嘘だが、事情を知らないリリスにとつたら、俺が語ったこれが真実でしかない。事実、今になれば黒羊齒が生きているのか死んでいるのか、どこに居るのかもわからないのだから、あながち嘘だとも云えないかもしれない。

「そう、明にしては仕事が遅いのね」

リリスは最後にそう云い捨てて、再び紅茶をすすりだした。

——鼎side

冷たい感情が押し寄せてくる。それはもう、自分自身でも制御できない。どうかしていると、自分でも思ってしまうくらいに、私の心は酷く乱れている。

「漆黒の闇は、自らをも蝕む……だが、それ相応の力も授ける」

聞き覚えのある声が聞こえる。その声の主は『ミシエル・マキシミリアン』私は彼と契約した。力を授かる代わりに、世界の終焉を見せると……けれど、それは単なる口実。私の真の願いは、力ではなく『真の自由』誰に追われるでもなく、ただ気ままに生きていける自由。そう、それはまるで野良猫の様な生き方。

「明……」

何も見えない闇の中、私は無意識に彼の名を呟いていた。特別な思い入れがあった訳ではないはずなのに、私は彼に助けを求めてしまっている。そんな自分が酷く滑稽に思えた。けれど、そんな人間らしさが残っていた自分に、初めて好意を抱けた。

「美月のお孫さんですか？」

またしても、ミシエルの不愉快な声が聞こえてくる。『美月の孫』その言葉の意味を理解すると同時に、私の中で一つの結論が出た。

——明は美月信臓（みつしんぞう）の孫。

それが意味するのは一つ、明は『All the truth』を保有する魔術師だという事だった……。

——明side

重苦しい空気の中、リゼットは栞さんとトランプで遊んでいる。パツと見だが、神経衰弱をしているようだ。

「明、ずっと気になっていたけど……あの子はお前の何なのだ？」  
いきなりリリスが喋り出した。そしてリリスの云う『あの子』とは  
多分リゼットのことだろう。

「あの子はリゼット、結界の中に閉じ込められてたところを、俺が助  
けた。」

俺がリゼットを紹介した瞬間、リリスの顔から表情が消えた。それ  
は『暴走の合図』だった。鎖を解き放たれた獣のように、リリスは  
リゼットに飛び掛った。

暴走——リリスは幼い頃に受けた、英才教育と云う名の人体実験  
の影響で、組織から言い渡された『討伐命令書（ブラックリスト）』  
に乗っている名前を耳にすると、時々自身でも制御できない殺人衝  
動が沸き起こる。それを俺は『暴走』と呼称している。

「落ち着け、リリス！」

必死になってリリスの体を抑えるが、リリスの小柄な体からは信じ  
られない程の力で振り切られそうになる。以前にも一回だけだが、  
こうなったリリスを見た。その時もまた、信じられない程の怪力で  
あのアーベルさんをなぎ倒していたのを覚えている。

「リゼットちゃん、こっちに！」

栞さんの的確な指示で、リゼットは栞さんと共に俺の部屋を出た。  
俺はそれを確認した後、なんとか取り押さえていたリリスを開放し  
た。

「……」

何も云わずにリゼット達が出て行ったドアの方を睨んでいるリリス  
その姿に、言い知れぬ恐怖を覚えつつも、俺はリリスの名を呼び続  
ける。下手に接近すれば、俺は確実にリリスになぎ払われる。それ  
だけは避けたい。この状態のリリスを外に出すのは余りにも危険す  
ぎる。

「つつ……！」

突然リリースが頭を抱えながら悶え始めた。安易に判断するのは危険だが、恐らくこれは暴走が収まりかけている兆候だろう。そして、俺の予想は見事に的中した。みるみるうちに、リリースは正気を取り戻していった。

「大丈夫か、リリース」

「うう……頭が、重い」

どうやら、リリースは完全に正気を取り戻せたようだ。今回の暴走の引金となったのは云うまでも無く『リゼット』だ。リリースの討伐命令書にリゼットの名前があったのかどうかは別として、一度暴走を起こした名前を聞いても、しばらくはこんな事になることは無いだろうが、出来る限りリゼットの名を出すのは控えたほうがいいだろう。

「じゃあ、俺は栞さん達を捜しに行つて来るから、リリースは俺のベッドで休んでいてくれ」

ベッドで横になるリリースは、俺の問いに対して右手を小さく挙げながら答えた。それを確認してから俺は外へと出て行った。

——優子 side

気が付いたとき、私は病院のベッドで寝ていた。全身に力が入らない。

「皆……！」

ぼんやりとだけど、あの時の事を思い出してしまった私は、毛布で顔を隠した。目の前が真っ暗になると、あの時の事を、ますます鮮明に思い出してしまう。だけどそれ以上に、明るい光が怖い。あの時、支部内が明るい光に包み込まれ、次の瞬間には、私を除いた他の皆が血だらけになって倒れていた。

「怖いよあ、明さん……」

不意に私が思い浮かべたのは、明さんの優しい笑顔だった。



## 第7章『変わる日常』（後書き）

長らく更新が出来ずに申し訳ありませんでした。  
パソコンの調子が戻ってきたので、これからまた更新してけると思  
うので、どうかこれからもよろしくお願いします。

## 第8章『動き出すタワー』

### 第8章『動き出すタワー』

#### 1・出現

——駆side

リーゼロッテとの戦い以来、俺やゆか達は平和に暮らしていたのだが、先日俺とゆかの目の前で魔術師同士の戦いが起きた。魔術やらと云う少し現実離れたモノとはすっかり決別できたと思っていたのもあり、俺は酷く動揺していた。

「駆くん？」

日曜日と云う事もあり、俺はゆかと一緒に散歩をしていた。元々インドア派の俺は、休みだからといって外へ散歩することなど無かった。それでも今は違う。以前までの考え方が変わったのもあるのだが、自分でも驚くほどに行動的になったような気がする。

「ごめん、ゆか……少し考え事してた」

あまり昔のことを思い出すのは嫌だが、今と云う幸せな時間を手に入れられたのは昔起きた悲惨な出来事を経験したからだろうと、今は素直にそう振り返る。姉さんが死に、赤い夜に取り込まれ、思い出すだけで胸が締め付けられそうになる経験を幾度と無くし、そして今の俺がいる。そして『水奈瀬ゆか』と云う掛け替えの無い大切な存在にも気づけた。

「そっか……そだ、今日はいい天気だね」

「ああ、そうだな」

穏やかに過ぎている時間が、こんなに心地よく感じられるなんて思

いもしなかった。

——ドオオオオオン！

「きゃっ！」

そんな穏やかな時間が、辺りに鳴り響いた爆発音で、突然終わりを告げた。

「なんだ?!」

急いで周囲を確認する。すると『綾女ヶ丘中央図書館』の方から黒い煙が上がっているのが見えた。

——明side

「栞さん、ありがとうございました」

リリスの『暴走』の件で俺は栞さんに謝っていた。

「大丈夫よ。それより、リリスちゃんは大丈夫なの?」

栞さんの優しい微笑みに感謝しつつ、リリスが家で待機している事を伝えた。正直なところ、俺は悩んでいる。このままりゼットと共に家に帰ったとき、リリスの反応が予測できない。またさつきみたいな騒ぎにもなりかねないからだ。

「しばらくの間、私がリゼットちゃんの面倒を見ましようか?」

思いがけない言葉だった。栞さんと一緒なら安全の保障ができる。

願ってもいない申し出ではあるが、今の俺には受け入れることが出来ない。

「いや、栞さんにはこれ以上迷惑を掛けられませんよ」

「全然大丈夫! 私たちは仲間なんだから、ね」

可愛らしい仕草ではあったが、今の栞さんは可愛いより、頼もしく見えてしまった。俺は改めて、この人は本当に素晴らしい使徒なのだと思う。使徒の中でも質の悪い連中が居るのが現実であり、皆が栞さんみたいなら、もう少しインデックスも居心地の良い組織になるだろう。

「何から何まで……本当にありがとうございます」  
「どういたしまして」

——?side

「目標の黒羊齒鼎の反応が感知できません」

「そうか、なら引き続き調査をしてくれ」

「了解しました」

『上』への定時報告を終え、私はホッと一息ついた。結果を求められる『トゥーレ』において、数日張っているにも関わらず未だに結果を出せないで居る私にとって、この『定時報告』は憂鬱でしかない。

「はあ……」

大きなため息を吐き、私は再び活動を再開させた。ここでの私の任務は『黒羊齒鼎の身柄拘束』である。この手の任務は身柄拘束と云う名義だが、実際のところは目標の生死は関係ない。文字通り身柄を確保すればそれで良いのだが、相手はトゥーレでも有名な大魔術師であり、見習い魔術師である私にとっては殺す殺さないではなく、見つけられるかられないかが問題である。

「なあなあ君、今一人なの？」

憂鬱真つ盛りな私の前に、一人のチンピラが絡んできた。派手なシヤツに、似合ってもいない茶色いレンズのサングラス。誰がどう見ても一昔古いと感じるような古典的なチンピラだ。

「はあ……今忙しいからあんたと遊んでる暇なんてないのぉ」

「そう言わずにさあ——」

私の肩に腕を回そうとしたチンピラに、うっかり魔術を放っていた。  
中級魔術の一つである『拒絶の波動』だ。  
デストラクション

——バキッ！

首の骨が綺麗に折れる音が聞こえた。拒絶の波動は本来、ただ単に

対象を衝撃で弾き飛ばす術であるが、私が今発動した拒絶の波動は少し手を加えており、相手に与える衝撃を一箇所に集中させる事で威力を上げた術だった。そのおかげでチンピラの首は見事に砕けたと言っ訳だ。

「はあ……だから日本は嫌いなんだよお」

私は半べそをかきながら路地を後にした。

## 2・帰宅

――明side

リゼットと栞さんに別れを告げ、俺は家路へとついた。と、その途中で妙な人ばかりと遭遇した。野次馬らしき連中の奥に、数台のパトカーと救急車なども見受けられる。

「何があつたんだ？」

俺は野次馬の最後尾にいる男に事情を聞いてみることにした。

「殺人事件らしいですよ？」

嫌な予感がした。綾女ヶ丘の治安は比較的良好であり、殺人事件が起こるような都市ではない。とすると、時期的に見てもこれは恐らく魔術が関係している。そんな予感がした。

「あのお……こちら辺に図書館って無いですかね？」

つい考え込んでしまっていた俺の背後で、急に声が聞こえた。慌てて目を声のほうへ向けてみると、そこにはまっくらな少女が立っていた。表現がオーバーなのではなく、本当に黒づくめの服装をしているのだ。

「図書館なら、ついこないだ全焼しちゃったよ……」

思い出したくも無い光景が脳裏に浮かんだ。

「そう、でしたか……残念です」

そう呟くと、少女は街中へと消えて行つた。どことなく不思議な雰  
囲気を醸し出している娘だと思つた。

そのまま俺は自分のマンションへと歸つて來たのだが、俺を待つ  
ていたのは地獄だつた。

「おい、リリス……何やつてんだよ？」

俺の声に、ビクツと体を震わせて飛び上がったリリス。分かりやす  
く何かをしてかしたのだと分かる様なシチュエーションに、俺は頭  
を抱えなくなった。

「あ、明！？ お、お帰りなさい！」

そしてまた、分かりやすくアタフタしてみせるリリス。その背後に  
微かに見えたのは異常なまでに黒く焦げた床だつた。その異常さか  
ら、場の空気が一変した。俺は神経を研ぎ澄ませ、リリスへと向き  
なおす。

「何かあつたのか、リリス？」

「え、あ、いや、何も、何もない……！」

少しだが、リリスのこの態度に引つ掛かるものがあつた。まるで、  
この焦げ跡に対して警戒心を強めているのが自分だけではないかと  
言う錯覚。

「……その焦げ跡って？」

「えつと……失敗した」

リリスが俺と目を合わせない。それは即ち『魔術の失敗』を意味し  
ている。リリスの得意とする魔術は主に『再構築』又は『修復』と  
言つた特殊な部類であるが、通常の魔術がからつきし使えないと言  
う、かなり珍しい魔術師の一人である。

「頼むからさ、俺の家で魔術を練習しないでくれ……」

「あの、ごめん……」

珍しく本当にへこんでいるリリスが、俺の目には新鮮に映つた。

「てかさ、もう体は良いのか？」

「うん」

この様子だと多分、あの後すぐにでも復活したのだろう……。

——美鈴 side

「はああああ！」

激しくぶつかり合う剣が火花を散らしている。気を抜けば殺されるのは自分だと云う極限の戦い。戦いとはいつでもお互いに命を懸けてするものだが、今回は否応なしにそれを意識してしまう。

「更に強くなつたじゃないか！」

今日の前にしているのはあの『草壁操』だからだ。この人は私にとつての憧れでもあり、最大の敵でもある。

「くっ……！」

一瞬だが、私は操の剣戟の凄まじさに腕が持っていなくなってしまった。それはつまり……。

「終わりよ」

冷たく言い放たれた終焉を告げる操の声と同時に、私の意識は『覚醒』した。

「はあああ……！」

気が付いたとき、私は自分の部屋で眠っていた。操との戦いは夢だったのだ。あの時から今日に至るまで、私は時々だが、このような夢を見てしまう。それも、決まって私が負けて終わる、と言う内容だ。

「大丈夫……」

私は震える右手を自らの左手で掴み、震えを抑えた。そして、一度深呼吸をした所で部屋を出た。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3395/>

---

教皇庁・禁書目録聖省～無色の救世主～

2010年10月17日07時38分発行